主 題：最も価値ある遺産
 聖書箇所：テモテへの手紙第二、その他

私たちはいったいどのようなものを私たちの愛する子どもや孫たちに残して行くのでしょうか？ある人はたくさんの財産を残すかもしれませんが、それは永久に残るものではありません。ある人はすばらしいものを残すかもしれませんが、それも永久に続くものではない。いったい、私たちは私たちの後に続いてくる者たちに何を残して行こうとするのでしょうか？また、何を残して行くべきでしょうか？聖書は私たち信仰者に、私たちの後に続いてくる者たちに残して置くべきもの、残さなければならないものは信仰であると教えます。なぜなら、それが永遠に価値あるものだからです。イエスを信じておられる皆さん、あなたがあなたの愛する家族に残しておけるもの、残して行かなければいけないものは信仰です。それが神が私たちに望んでおられることです。

テモテへの手紙第2をまず見て行きます。1：5に「**私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。…**」と、パウロはテモテのことを考えたとき、彼の純粋な信仰を思い起こしたのです。純粋な信仰というのは偽りのない信仰です。本物の信仰です。装っていない、偽っていない、そういう信仰をテモテがもっているとパウロは確信したのです。つまり、テモテは間違いなく救われているとパウロは確信しているのです。なぜ、パウロ自身がそのように確信することができたのでしょうか？そのことについては彼がここでも教えてくれるのですが、本当の信仰は必ず働きをもたらします、何か実をもたらします。イエスを信じて罪赦された人は、そこで終わらないのです。その人はそのすばらしい救いをだれかに知ってもらいたい、そして、自分の愛する者も自分と同じようにこの救いにあずかってもらいたいと当然願います。ですから、私たちは祈りながら、機会を求めながら、必死になってこのすばらしい救いを伝えようとするのです。そのことを私たちはここでも見ることができるのです。というのは、パウロはこのテモテにある純粋な信仰というのは、実は、彼の愛する家族から彼が受け継いだものだと言うのです。5節を見ると、「**そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。**」とパウロは言います。ですから、本物の信仰、本当の救いというものを、テモテは自分の母ユニケ、また、祖母のロイスから聞き、そして、信仰に至ったのだと見ることができます。確かに、「使徒の働き」の中にそのことを見ます。このロイスとユニケがいつイエスを信じたのか分からないのですが、間違いのないことは、彼らはパウロの第1回宣教旅行のときに信仰に至っています。使徒13：13－14：21にパウロの第1回宣教旅行のことが記されていますが、その中でこの二人はおそらく信仰に至ったのでしょう。

そして、使徒16：1から見ると、テモテが出てきます。そこにはこのように記されています。16：1「**それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。**」と、テモテがもうすでにクリスチャンであったと言っています。ですから、第2回宣教旅行が始まり、その時にパウロはテモテに出会っているのです。こう続きます。「**信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、：2 ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。**」と、ということは、第1回宣教旅行で救われたロイスとユニケの信仰が本物だったから、彼らは私は救われて天に行けるからそれでいいとは決してしなかった、そのすばらしい救いを愛する者たちに知ってもらいたいとして、彼らはテモテにその信仰を伝えたのでしょうか。そして、テモテが信仰に至り、その後、彼は成長するのです。だから、本物の信仰だと言えるのです。本物の信仰は死んでいません、生きています。本物の信仰は自分が救われたそのすばらしい救いを人々に伝えたいとすると同時に、救われた者自身ももっと神にあって成長したい、もっと神に喜ばれる者になって行きたい、もっと変えられて行きたいと、そのような願いを私たちにもたらします。だから、テモテはルステラやイコニオムという町にあって、クリスチャンたちの間で「**評判の良い人であった**」、つまり、テモテの信仰がこの人たちの間で評判になっていたのです。ですから、イエスを信じたテモテがその後、信仰において成長していたことがここでもうかがい知ることができます。

このテモテ、彼の父親はギリシヤ人で異邦人です。おそらく、信仰はなかったのでしょう。ところが、母親はユダヤ人で祖母もそうでした。彼らが信仰に至ったのです。そのような家庭にテモテは生まれたのです。この母親も祖母も大切な務めを彼らの子どもに、孫に為しました。彼らは大切な神のことを子ども、孫に伝えたのです。この大きな責任は私たち一人ひとりが負っているのです。特に、子どもをもっている皆さんにはそのことは非常に大きな責任です。もちろん、もっていないからその責任がないというのでは決してありません。クリスチャンであれば皆その責任を負っているのですが、私たちはこの

テモテという一人の人物に対して、だれが彼の信仰に関わったのかについて、間違いなく彼の母、祖母であったということを見たとき、自分の愛する子どもたちにこの福音を伝えて行くということは、親にとって最も大切な責任であることが出来るのです。

では、どのように伝えて行くべきなのか、そのことを今日見て行きます。みことばは教えてくれます。私たちが私たちの後に従ってくる者たちに残しておきたいもの、残さなければならない最も価値ある、この信仰という財産をどのようにして彼らに残して行くのでしょうか？

☆私たちの後に続く者たちに、この信仰をどのように伝えて行くのか？

1. 私たちのことばによって

Ⅱテモテ3：15をご覧ください。「また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。」と、これはテモテのことですが、テモテは信仰をもってからずっと母親と祖母によって、もちろん、他の教師たちもいたでしょうが、聖書を教えられてきたのです。それがどうして大切なのか、後半に「**聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。**」とあり、私たちはみことばによって救いに至るのです。16－17節「**16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。 17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。**」、クリスチャンが成長して行くために、ますます神に喜ばれる者になって行くために必要なものは聖書である、だから、聖書を教えなければいけないと言うのです。テモテを見たとき、彼は信仰をもってからこのみことばを教えられ続けて来ているのです。ユニケもロイスも大切な責任をしっかりと果たしたのです。そして、このテモテは神の前にすばらしい働き人として成長して行ったのです。親としての感謝がここにあります。親として神から託された大切な責任を十分に果たしたという感謝がそこにあります。箴言の中でソロモンはこのように言います。23：15－16「**わが子よ。もし、あなたの心に知恵があれば、私の心も喜び、 16 あなたのくちびるが正しいことを語るなら、私の心はおどる。**」と、ソロモンは自分の子どもに正しい知恵があれば私の心は喜ぶと言いました。自分の愛する子どもたちが神をしっかりと知り、神にあって正しく歩んでいる、何が正しくて何が間違っているか、その判断をする知恵をもっている、神に喜ばれる歩みを為している、それを見るときに私の心は喜ぶと。そして、「**あなたのくちびるが正しいことを語るなら**」、その子どもが正しいこと、神に喜ばれることを語っているなら、私の心はおどると言うのです。ソロモンは親は子どもに対してどれほど大きな責任を負っているのか、そのことを教えてくれるのです。なぜなら、そういう子どもたちになって行くために、私たち親はしっかりと神のみことばを教える行かなければいけないのです。同じように、箴言の22：6に「**若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。**」とあり、私たちは子どもたちにしっかりと、正しく歩むべき道を教える行かなければいけないのです。そうすれば、子どもたちはいくつになってもその道から離れないというのです。幼いときからの訓練は大切なものです。その訓練というのは一生の習慣や生き方、選択、その人の歩む人生の目的などに影響を与えて行くのです。幼いころからしっかりと子どもたちを教える行くなら、子どもたちはその訓練によって、どのように生きて行くべきなのか、何を目標に生きて行くべきなのか、何を選択するべきなのか、そのようなことをしっかりと判断する子どもたち、人になって行くというのです。ですから、両親は神のみことばをしっかりと教えることが必要であるし、愛の懲らしめをもって彼らを訓練して行くことが必要です。甘やかすことなどはみこころに反する教えです。箴言13：24でソロモンはこのように言います。「**むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。**」と。つまり、ソロモンがここで言っていることは、もし、あなたが神が託してくださったその子どもに対して懲らしめをしないなら、あなたの子どもは子どもを憎む親が育てた子どもと同じになるということです。とても厳しいことばです。ぞっとすることばです。子どもを愛さない親が育てた子どもたち、それと同じようになってしまう、もし、あなたが正しく子どもたちを教え、正しく子どもたちを教育して行かないなら…。子どもが幼いときから私たちは彼らを懲らしめることが必要です。もちろん、これは箴言の中を見ると、ことばだけでなく、実際に肉体的な懲らしめというものをソロモンは教えています。必要であれば私たちは spankingしなければいけないのです。しかし、大切なことは私たちが正しい動機をもってそれを為すことです。私たちがそれをするとき、子どもたちはしっかりとその目的を、その理由を理解しなければいけません。私たちは決して自分の中の怒りを子どもたちにぶつけてはいけません。子どものしていることを見ていらいらして、その怒りを子どもにぶつけるというのは子どもにとって何のプラスにもならない、子どものためにしたのではなく自分の怒りをただぶつただけに過ぎない、そのようなことを聖書は命じているのではないのです。懲らしめるというのは、彼らを正しく教える行くことです。このことは後でもう少し詳しく見て行きます。

私たちは家庭において子どもたちをしっかりと正しく導いて行くというとても大きな責任をもっているのです。平成17年度、千葉県で県が行なったモニターがあります。青少年が非行に走る原因について

モニターをもったのですが、その結果、一番多かったのが「家庭教育、親のしつけ等が十分でない」というのが30.2%もありました。その次に、メディアの影響が15.2%でした。ですから、クリスチャンでない人も分かっているのです。子どもたちが非行に走ってゆく原因は家庭にある、親がきちんとしつけをしないから、正しいことをしっかり教えないからと。パウロはエペソ人への手紙6:4でこのように言います。「**父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。**」と、ここに「父たちよ」とありますが、このことばはヘブル人への手紙11:23を見ると、同じことばが「両親」と訳されています。「**信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって…**」と、この「両親」と「父たち」は同じことばです。だから、子どもを育てて行くというのは母親だけの責任でもないし、父親だけの責任でもない、両方の責任です。しかし、もちろん、子どもたちを育てて行くその直接的な責任は父親にあります。男性が一家の長だからです。家庭における責任は男性にあります。そこでパウロは「父たちよ」というのです。「**子どもをおこらせてはいけません**」とあります。これは子どもたちに何かあって怒ったということではありません。ここで言われている「**おこらせてはいけません**」というのは、非常に根深い怒りです。子どもがその心の中にずっと持ち続けている怒りです。常に腹を立てている、ずっと親に対して憤慨し親を恨んでいる、そのような状態に子どもたちをおいてはいけなないと、それがここで記されている命令です。では、どのようにしてそのような状態になるのでしょうか？私たちが道理に合わないこと、筋の通らないことを子どもたちに言ってしまったりする、親ができないことを子どもに命じたりする、できないむちゃな要求を子どもに押し付ける、子どもを人の前で非難したり、酷評したり、これらのことによって子どもたちは怒り、絶望、憤り、憤慨、恨みなどを持つてしまうのです。このような間違っただけのことを子どもに対してしてはならないというのです。もちろん、私たちは完全ではありません。子どもたちの前で失敗することも多くあります。しかし、私たちは子どもたちの前で失敗を隠さずに言わなければいけない、私たち自身が神の前に正しく歩んで行かなければいけない、私たちが大切なこととして覚えるべきことは、私たち親は子どもたちに対してとても大きな責任を神からいただいているということです。その責任は子どもたちを正しく教えることです。そして、その家庭の中で、子どもたちが私たち親に対して、神に対して深い怒りをもっている、そのようなことを私たちは決して許してはいけなないということを言っているのです。

「子どもの人権を守る市民の会」というのがあって、少年少女の非行犯罪について考えるということでいろいろな投稿記事がありました。読んでいておもしろいと思ったのは、一人の山形県に住む中学生、13歳の男の子の投稿です。彼は自分のクラスにも悪い友達がたくさんいると言い、それに対して彼は心を痛めています。だから、このように書いています。「友だちはことばが悪い、何でも自分が主、授業はさぼるし楽しいことしかしない。服装は悪いし礼儀はなっていない。言い挙げればきりがありません。本当に腹が立ってきます。でも、私たちがその友だちに引きずられないで、巻き込まれないで、私たちがその友だちを立ち直らせなければならぬという責任をたまに感じます。放って置いたらどこまで非行に走るか分かりません。」と、13歳の男の子が自分のクラスの友達たちをみてそう言っているのです。その彼がこう言うのです。「でも、こういう考え方を非行少年の親たちにも持ってもらいたいです。お前は！とか、なんで分からないんだ！お前のせいでお母さんは世間の恥だとか、自分の子どもに怒鳴りつける前に、自分を見つめ直したらどうですか？自分を振り返ってほしいのです。」、この叫びをどう思われます？子どもたちは私たちが知っている以上に私たちを見ています。あなたの歩みを見ているのです。子どもたちというのは神から預かった大切な宝です。この子どもたちを私たちはしっかり治めて行かなければいけないのです。それは信仰者として最も大切なことのひとつです。それができない人たちは教会を治めることができない、家庭を治めることができない人は教会を治めることができないのです。聖書が私たちに教えていることは、私たちはみな霊的なものとして成長しなさいということですが、そのために必要なことは、私たちはまず家庭をしっかり治めなければならぬのです。

そこでこのエペソ6:4でパウロは子どもたちを育てなさいと言います。「**…かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。**」と、「育てる」ということが大きな責任だと教えるのです。この「育てる」には二つの意味があります。一つは彼らが生活して行くのに必要なものを与えなさい、食べ物やからだの成長に必要なものを与えて行くということです。もう一つは、教育を与えるということです。どのような教育でしょう？塾に送りなさいということではありません。私たちクリスチャンとして子どもたちにどのような教育を施して行くのか、それはその子どもたちが神の前に正しく歩んで行くために必要なことを教えることです。私たちは子どもたちに神はどのようなお方なのかを教える行かなければいけません。自分の自我と神のみこころとが衝突するときに、神の前に何が正しいのか、そのことを自制心をもって正しく選択できる子どもたちになって行くように、私たちは訓練して行かなければならぬのです。子どもたちが神に対して従順であるように、そして、親に対しても従順であるように教える行かなければならぬ、そのことをしっかり教えなさいというのです。そのために、パウロは「**教育と訓戒によ**

って」それをしなさいと言いました。「教育」というのはことばによって教えて行くことです。子どもたちと話し合いながら彼らが神の前を正しく歩んで行くように、しっかりことばをもって教えなさいと言うのです。子どもたちはいろいろなことを経験しています。今の子どもたちの環境は私たちが子どもだった時に比べてはるかに誘惑が多い世界になっています。そういう中で彼らが経験することは私たちが経験しなかったことかもしれません。私たちは彼らと時間を取らなければいけない、彼らと時間をとって話をし、この状況、あの状況にどのようにして行けば良いのか、彼らにアドバイスを与えて行かなければならない、そうして彼らを励まして行かなければならないのです。私たち親は自分の時間を犠牲にしても子どもたちに時間を費やすことです。そして、二つ目に「**訓戒**」というのは訓練です。これはことばよりも、ある時にはほうびを与え、ある時には罰を与えるという、そういうことで教えて行きなさいということです。当たり前なのですが、約束を破れば当然そこには罰があり、守ればほうびがあります。だから、子どもたちが正しく歩み続けて行くように、私たちは彼らの歩みを見て、ある時にはそのように矯正しながら、ある時にはスパンキングを与えながら、正しい方向へと歩んで行けるように訓練するのです。箴言10:1に「…**知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな子は母の悲しみである。**」とあります。先ほどから見ているように、子どもが本当に神の前に正しく歩んでいるなら、それは親にとって大きな喜びです。しかし、そうでない場合、特にここには「**母の悲しみである**」と書いてあります。もちろん、両親にとって大きな悲しみですが、特に母親にとって、確かに子育ての責任は父親にありますが、父親よりも多くの時間を子どもと過ごしているからです。ユダヤ人の子どもたちは2~3歳位まで母乳を与えられ続けました。それだけ母親と時間を共有したのです。そこから子どもたちは大切なことを教えられ続けて来たのです。パウロは私たちが私たちの子どもや孫たちに、大切な信仰という財産を残して行くために、しっかりことばをもって彼らを教え導いて行くことが必要だと教えました。それがみことばが私たちに命じていることです。

2. 模範（生き方）をもって

二つ目に、私たちは模範をもって為して行くことをみことばは私たちに教えてくれます。テトスへの手紙2:3-5を見てください。「**同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。:4 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、:5 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。**」と、このようにパウロは言いました。4節の最初に「**そうすれば**」とあります。もう子育てを終わった年輩の婦人たちも、しっかり神の前に正しく歩んで行くなら、その生き様が、その信仰の歩みがすばらしい模範となって、後から続いて来る人たちに大切なことを教えることになると、そのようにパウロが教えるのです。4節には「**若い婦人たちに**」と、今子育て中の皆さんやこれから子育てをする皆さんに対して、神がどのようなことを望んでおられるのか、あなたがどんな人物になって行くことを、どんな信仰者になって行くことを神は望んでおられるのか、ここに七つのことが記されています。

- (1) 夫を愛する者になりなさい=夫を愛すること、あなたにとって神の次の最優先事項は夫だと言います。あなたの仕事でもあなたの親でも子どもでもない。夫に対して親切であり優しくあり続けなさい、夫に仕え彼を励ましてあげなさいと、なぜなら、妻は助け手として造られたからです。自分の幸せよりも夫の幸せを優先して行きなさい、そういうクリスチャンでありなさいと言います。
- (2) 子どもを愛する者になりなさい=無条件に子どもを愛するということです。よく私たちが聞くことは、この子は私の理想の子だからとか、よくできるからとか、条件をつけてしまいます。パウロが教えることは、無条件で、神があなたに託したのだからその子どもを愛して、子どもにとって大切なことを教えて行きなさいということです。
- (3) 慎み深く=節度を保つということです。神の前に何が正しいかを考えて欲望に惑わされることなく正しい判断をして行きなさいと。
- (4) 貞潔=自分自身を聖く保つだけでなく、人に誘惑を与えないようにと言います。
- (5) 家事に励みなさい=確かに今のこの世にあってこれはポピュラーな考え方ではないでしょう。女性が家にいることは何か損をしているような考え、しかし、聖書はそのように言っていません。男性には男性の責任が与えられ、女性には女性の責任が与えられたのです。女性には家庭という家族に大きな影響を及ぼす大切な場所が与えられています。そこにおいて責任をしっかり果たしなさいと教えるのです。
- (6) 優しく=例外なくすべての人に対して思いやりとあわれみをもって、良いことを為して行くことです。
- (7) 夫に従順でありなさい=自ら進んでその人の権威のもとに入ろうとすること、彼の下に自らを置こうとすることです。そのようなことをすると何か損をしているように思ってしまう、しかし、それ

はサタンの惑わしであって、みことばが教えることは、自ら進んでそのようにしなさいということです。

このように生きて行きなさいとパウロは教えてくれます。ですから、これから子育てをする人も、今子育ての最中にいる人も、このように歩いて行きなさいと教えるのです。では、もうすでに子育てを終わった人は、自分には関係ないではなく、あなたには大切な務め、責任があるということを言うのです。つまり、あなたがますます神の前に正しく歩いて行くことによって、あなたはすばらしい影響を若い人たちに残して行くことができますと言います。クリスチャンの皆さん、あなたの後に続いて来る若い人たち、彼らのためにもあなたはすばらしい模範になりなさいと教えるのです。あなたは自分の歩みをしっかり注意しながら、正しく歩み続けて行くようにとパウロは教えるのです。

◎模範であるために、パウロは四つのことを教えています。

(1) 態度においてきよくあること＝自分の行ないにおいてきよくありなさいと言います。「**神に仕えている者らしく敬虔にふるまい**」と、日本語に訳したこの訳者は、このことばの意味をできるだけ分かり易く伝えてくれました。「**敬虔**」に説明が加えられています。「**神に仕えている者らしく**」と。というのは、このことばがもっている意味は「**聖なるものにふさわしい、神聖な者にふさわしい**」とか、また、ある辞書には「**聖職に携わる祭司らしく**」とあります。つまり、あなたはそういう存在なのだということを覚えて正しく歩いて行きなさい、きよい働きに携わっている者として、神聖な働きに携わっている者として生きなさいと、それがまずパウロが年輩の婦人たちに教えたことです。ここに「**ふるまう**」ということばを付けているのは、その行動がうわべだけのものであってはならないということです。そのような行動が心から出て来なければいけない、そこで「**ふるまう**」ということばを敢えてここで使っているのです。これはからだや心の態度、状態を表わすことばです。ですから、いつも行ないにおいて態度においてきよくありなさいということです。そのために、あなたの心がいつも神に対して恐れを抱いていることが必要だと言うのです。そして、自分の行動に注意を払いながら、主が喜んでくださることを選択しなさいと言います。

(2) ことばにおいてもきよくあるように＝「**悪口を言わず**」、悪口を言わないことです。悪口とは中傷する、口が悪い、誹謗する、という意味をもったことばです。このことばはⅡテモテ3：3では「**そしる者**」と訳されています。「**情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、**」、人のことを悪く言う人です。非難する人、人をけなす人です。そのようなことはいっさい口から出してはならないというのです。なぜでしょう？神を喜ばせないからです。ギリシャ語ではこの「悪口」ということばはマタイの福音書4：1、5を見ると「サタン」（悪魔）と訳されています。同じことばです。つまり、悪口を言うというその行為は、サタンの行為なのです。サタンがいつもそれをしているのです。だから、もしあなたが人に対して悪口を言うなら、間違いなくあなたはサタンを喜ばせるのです。

(3) 満ち足りることに模範となるように＝態度やことばにおいてきよくなるだけでなく、あなたは満ち足りることに模範となりなさいと言います。「**大酒のとりこにならず**」と言います。神以外のところに満足を求めようとすることです。イエスを信じてイエスとともに歩んでいる、そこに満足があるはずなのに、しかし、その信仰の歩みに問題がある場合、イエスは私を本当に満足させることができない、私の心はこのようにむなしい状態にあると、他のところに満足を求めようとするのです。私たちの問題は神以外のところに満足を求めようとするから、いつまで経っても満足を得ることができないことです。しかし、悲しいことに、クリスチャンがイエスを信じてこのすばらしい祝福にあずかっているのに、自らの罪であったり、間違った歩みゆえに、その祝福をいただくことができない、そうして、渇きを覚える、そして、その責任はあたかもこの信仰にあるかのように、神にあるかのように思って神以外のところに行こうとするのです。パウロは言いました。ピリピ4：11で「**乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。**」と。貧しいから、物があるから、そんなことに私は左右されない本当の満足を私は得たのだというのがパウロの教えです。それが神の祝福です。Ⅱコリント9：8では「**神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。**」と、神が私たちを満たしてくれる、だから、私たちに必要なことは、この神によっていつも満たされて歩み続けることです。今、アルコールに依存するという傾向は、日本にあってかなりの問題になって来ているようです。富山市の市民病院のドクターによると、メール相談を受けるそうですが、3年間に120件の相談だったが、99年以降は非常に増えてきて、アクセス件数も一日当たり30件から100件にまで増えているというのです。しかも、相談者の平均年齢は30歳で、20代30代が9割を占めていて、その中の半数が女性なのです。国立アルコール症センターのある医者は、新規受診患者の中で女性の占める割合は1980年には9.4%だったのが、99年には14.3%に増加したと言ひ、アルコール消費量から

推計すると、この30年間で女性のアルコール依存症数は3倍から4倍に増えていると考えられると言います。その原因について札幌のある病院の院長はこう言います。「原因は多様で複合的で、今現在のことだけではありません。仕事、対人関係、家族問題、うつ状態、中年の生きがいの喪失、老年期の暇などが原因にもなります。常に不満だらけで、自分中心にしか考えられない性格もそれに関係している。」と。また、他のものにはその原因としてこのようにありました。「高学歴の時代、そして、小さい頃からお母さんが子どもに高学歴志向の教育をプッシュする、いわゆる、プッシングマザーというのが日本でも多くなり、そのために優等生でいい子であるなら母親の愛情を自分に引き付けて置くことができるという、愛情不足を埋めたい女の子が、母親の期待に沿って頑張る結果、おとなになって拒食症、アルコール依存症になり易い傾向があります。母親の愛情不足の人が意外と少なくありません。つまりは母親が幼稚なための出来事です。」とお母さんもお父さんも、あなたがクリスチャンであるなら、神のくださる、そして、私たちが最も必要としている、この満足をもって生きることです。生きることができるのです。それが神の約束です。もし、あなたが本当にどんな状況でも、神にあって神のくださる満足によって満ち足りているなら、後から続いて来る人たちにとってすばらしい模範となります。

(4) 気配りにおいても模範になるように＝「良いことを教える者であるように」とテトス2：3に記されています。良いこと、神のみことばを教えるて行くのです。しかし、ここで「教える」とあるのは、教室や公的などところで教えるという意味のことばではありません。個別に助言や励ましを与えて行くということです。周りを見て、あの人が弱っているから励まそう、この人が何か悩んでいるようだから励まそうと、そのように私たちは周りに気を配って、必要のある人たちに対してことばをもって励ましを与えて行こうとする、そのことをパウロは言ったのです。

どうでしょう？皆さん、若い人たちがたくさんいます。既婚者もいるし独身の人もいます。年輩の婦人たちに対して神が言われたことは、周りをよく見て、若い人たちを励ましてあげなさい、しっかりみことばに立って、みことばをもって励ましを与え助けてあげなさいと、そういうことにおいてもあなたは模範となる必要があると、それがパウロがここで教えてくれたことです。ことばをもって、私たちの後に続いて来る者たちをしっかりと教えて行く、そして、信仰の先輩として、私たちの生き様をもって後から続いてくる子どもや孫たち、人々に教えて行く、私たちクリスチャンは大変な責任を神からいただいたのです。恐らく今、いろいろなことが皆さんの脳裏をよぎっているでしょう。いろいろなことを考えておられるかもしれません。今、あなたがどのような状況におられたとしてもしっかりと覚えておかなければいけないこと、神が望んでおられることは、まず、あなた自身が神のみことばに従う者になって行くことです。そのようにするならばすべてがうまく行くということではありません。しかし、少なくとも、あなたの責任はあなた自身が神の前を正しく歩んで行くことです。みことばに従って歩んで行くことです。あなたがすばらしい女性として、すばらしい男性として、信仰者としてしっかりと成長することです。そして、私たちの愛する者たちのことを常にとりなして行くことです。神があなたに求めておられること、それはあなたが主によって変わって行くことです。あなたが主において正しい歩みを為し続けて行くことです。なぜ、そのことが必要なのでしょうか？パウロが教えてくれます。「それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。」(テトス2：5)、つまり、そのような歩みを為して行くときに、神のことばがそしられることがない、神のことばがののしられたり、悪口を言われたりすることがないということです。おまえの神はそんなものか、おまえの神はおまえを変えることができないのかと、そのようなことを言われないうために、あなたはどのように神からいただいたこの責任をしっかりと、神の助けによって果たして行きなさいと教えるのです。クリスチャンの皆さん、人を変えることができなくても、神はあなたを変えてくださる、そして、今あなたに必要なことは、神さま、私を変えて行ってください、みことばに従う者に私を変えて行ってくださいと、その決心をして歩むことです。神があなたを変えてくだされば、神はあなたを通して働いてくださる、そして、神はあなたを通してみこころを為して行ってくださるのです。その助けは私たちに備えられています。どうぞ、神の恵みによって歩んでください。そして、あなたの子どもやあなたの孫や、あなたの後について来る愛する者たちに、一番大切な信仰という財産を残してください。その責任が私たちはあるのです。その責任があなたに与えられています。